

Gallery Talk 誌上 ギャラリートーク

旧高松市立美術館をふりかえって

第1期常設展「旧高松市立美術館ベストコレクション」
(2013年4月5日～6月2日)を記念して

高松市美術館が現在の地に開館したのは1988(昭和63)年8月6日。今年で25周年を迎えます。ところで、その高松市美術館がかつて観光名勝として名高い栗林公園内にあったことをみなさんご存知でしょうか。2013年第1期常設展では、この旧高松市立美術館時代に収集されたコレクションが紹介されています。それに関連して、ここではまず旧美術館について振り返ります。

戦時中、高松は空襲で大きな被害を受けましたが、地元の美術家たちは戦後いち早く制作を再開し、県下の美術活動はしだいに活発になっていきました。やがて昭和24年に開催される「高松観光大博覧会」の科学館を博覧会終了後、美術館として使用することが決まり、漆芸家・明石朴景、磯井如真をはじめとする県下美術家たちによる作品売上の寄付や、県下小中学生からの寄付などの協力を得ながら、美術館建設が進められていきました。戦後の混乱期、地域が一体となり力を合わせて美術館の建設をサポートしたのです。建物は高松出身の画家・猪熊弦一郎の紹介で建築家・山口文象(ぶんぞう)が設計しました。

こうして旧高松市美術館は1949(昭和24)年11月3日に開館しました。戦後間もない頃に発足した美術館といえば1951年開館の神奈川県近代美術館が有名ですが、それよりも早い開館でした。展示室の広さは今の高松市美術館の4分の1ほど。現在と比べるとややコンパクトな展示室でした。バリアフリーに対応した玄関スロープや自然光を取り入れた展示室などの充実した設備、そして栗林公園の松の緑と調和した白い外壁のモダンな姿から、開館当初より全国から注目を集めました。

旧美術館はその幕を閉じる1987(昭和62)年11月30日までの38年間、展覧会や教育普及活動によって地域の人々から愛され続けました。入場者数は延べ420万人、美術講座受講者数は延べ35万人にのぼります。この旧美術館時代に収集された作品は154点。このたびの常設展では、現在では1500点を超えるコレクションの出発点となったこの旧美術館コレクションから代表的な日本画、洋画、彫刻31点が展示されています。[佐々木真理子]

参考文献：『三十八年史』高松市立美術館、1988年



東郷青児《聖道女》1935年 高松市美術館蔵

つぎに、常設展出品作の中から東郷青児《聖道女》をご紹介します。東郷といえば、陶器のような肌をした美人画で人気を馳せたことで有名ですね。もともと、若干19歳で二科賞を受賞し、華々しく画壇にデビューした当時の絵はキュビズムや未来派の影響を感じさせる前衛的な作風でした。しかし24歳から7年間パリに留学した後は、一変して前衛から自らが「美人画」と呼ぶ作風へと変化していきました。

《聖道女》は、東郷青児が美人画を描き始めた比較的初期の作品ですが、モダンな感覚と甘い抒情性は、一世を風靡した独自のスタイルをすでに感じさせます。東郷青児は「だれにも親しまれ、しかも通俗ではなく高いものをもち常に時代の先端を行く」(*)ことを理想としました。80年近く前に描かれたとは思えない、じつに瑞々しい魅力を放つ作品です。[鈴木典子]

(*)『生誕100年記念 東郷青児展』産経新聞社、1988年、p57



開館記念式典風景



展示風景(第9回日展、1953年)

顔……。参加者が一つの輪になって全員右側の人の似顔絵を描き、左側の人が描いてくれた自分の似顔絵との間を数枚の絵で近づけていくというもの。出来上がった絵をすべて写真に撮って、パソコンで編集してパラパラ漫画のように順番に映すと、参加者全員似顔絵のエンドレスしりとり(?)の出来上がり！



→自分と他の顔、そしてその間をつなぐ複数の顔を描いた参加者と伊藤存氏

「展示会に出品された存さんの作品は、個性や感情を極力排除して等価値で並ぶ『しりとりおきも』と、自分の意志が介入する『人的な潮のドローイング』。存さん、自分の作品の間にシソーラの支点をずらしてくれるようなワークショップをしたい、自他の区別をなくしたいという存さんの目論見でしたが、「子どもたちが良い絵を描いてくれて、予想以上に良いワークショップになった」と感想を話されました。

「池田幸子」



山木朝彦教授(鳴門教育大学)「美術館・教育普及のいま(上)」大分合同新聞にてciviの活動が紹介される

2013年2月25日の大分合同新聞文化面に私たちシヴィイの活動が紹介されました。「社会参画し、自己啓発」「ボランティアこそ一番の宝」との見出しがおどる記事を書いて下さったのは、鳴門教育大学大学院 山木朝彦教授です。山木教授は大分合同新聞に美術教育の普及に関して連載しておられ、美術館ボランティアに興味を持ち当館に取材に来られました。1月14日取材があり、シヴィイからは私を含め池田さん、山上さんの3名、そして牧野学芸員で色々質問を受けました。シヴィイ結成当時の話やボランティア養成講座の思い出、印象に残った展示や作家、またシヴィイが企画展のギャラリートークをどのように準備しているか等々話をしました。山木教授は「しりとり」を創刊号から25号まで読み込んでおられて、ボランティアの活動記録という役目以外にも読み物としてもおもしろい！と言っていたいただきました。今回の取材で結成当時の話は3期募集の私にとって改めて聞く機会となり、初期のメンバーはシヴィイの宝！シヴィイがシヴィイを支えてるんだ！と、もつとも大切なことに気づくことができました。



「二好ひさこ」

貸出人気ランキング

発表!

美術館の某氏から「こんなのあるよー」とある資料を見せてもらいました。それは高松市美術館コレクション貸出数ランキングで、開館してから25年間の作品ごとの貸し出し回数が、多いものから順に書き出されているのでした。これは面白い!ということで、そのなかのベスト3をここに発表します。

まず1位は「やはり」といふべきか、**田中敦子《電機服》1956・86年**(貸出回数11回)。作者は車でネオン看板を眺めた時に「ネオンみたいな服を作たらどうか」と思い、大量の電球が点滅するこの作品を制作しました。世界各地を旅しており、今現在は(この号の他の記事でも触れているように)NYで光と熱を出して頑張っています。2位は**高松次郎《影 No294》1970年**(9回)。同じく「影」シリーズの代表作である**《影の圧搾》1965年**(6回、4位)よりも上位なのはやや意外です。《影 No294》の方が先に収蔵されたからかもしれません。2位はもう1点あります。**マルセル・デュシャン《L.H.O.O.Q》1964年**(9回)です。《モナリザ》の複製に鉛筆でヒゲを描き加え、それを作品として発表したいわくつきの作品ですが、20世紀における美術の革命家のひとりであるデュシャンの代表作ということで堂々の2位です。3位は同じく**デュシャン《ひげをそったL.H.O.O.Q》1965年**(8回)。「ヒゲあり」に惜しくも1票差で抜かれました。



田中敦子《電機服》1956・86年
高松市美術館蔵

続いて圏外から、個人的に気になった作品をご紹介します。まず6位 **森村泰昌《肖像(ヴァン・ゴッホ)》1985年**(4回)。日本の美術界で変身系アートの第一人者と言えばこのお方。自分の姿を何かに変身させる出発点となった記念碑的作品です。もう1つの6位は **福田美蘭《ゼフィロスから見たクロリスとフロラと三美神》1992年**(4回)。基になったのはボッティチェリ《春(ラ・プリマヴェーラ)》。この名画の右端に描かれた西風の神ゼフィロスの目線が描かれています。絵に描かれた人物が見ているであろう光景を想像し、画家のタッチを模倣して描いた愉快な作品です。「名画」に介入するタイプの2作品が仲良く6位というのは何とも微笑ましい限りです。そして7位の **イサム・ノグチ《山つくり》1982年**(3回)。折り曲げた2つの金属板を組み合わせた、いたってシンプルな作品で、どこか折り紙を連想させます。いつも美術館の常設展示室前で来館者をお出迎えている印象がありますが、美術館から出かけたことがあったのです。ちなみに、《山つくり》の傍にある **オーギュスト・ロダン《オルフェ》**も他館への貸し出しで台座から降りてお出かけたことがあるそうです。

以上、貸出人気ランキングのコーナーでした。美術館の常設展示室などでこれらの作品と出会ったら、ぜひ(心の中で)盛大な拍手を！
[佐々木真理子]

復活! わき役のひとりごと。

どこからか哀調を帯びた笛の音がします。あたりを見回すと、あろうことかここはうっそうとした密林。<私>の上で長い髪の女はまだまどろんでいます。<私>は何処にいるのか?何を隠そう、「何で密林にお前がいるのか」と、皆に不思議がられる存在の、赤いピロートの長椅子が<私>です。

こんなジャングルに女と長椅子を連れてきた張本人はパリから一歩も出たことのない画家アンリ・ルソー。1910年、ルソー晩年の年に、絵具代もままならない貧困の中で《夢》は描かれました。画家はこの作品を3月に出品し、その半年後にあつてなく病死してしまいます。最晩年の傑作となったこの絵には、彼自身の夢のすべてが盛り込まれています。昼の名残りの、青みを残す空には鏡面のような月が出ています。その月明かりを頼りに密林に目をこらすと、異国の植物がしっとり密生し、花は甘やかに、熟した実は誘惑の香りを放っています。獣も鳥も、笛の音に誘われて密林の奥から姿を見せたのでしょうか。笛を吹いていたのは目に光を宿す黒い肌をした人。彼らはあくまでも<私>の上に君臨する女、すなわち女神のしもべで、すべてが彼女の夢のために存在するのです。

さて、夢とうつつを漂っていた女神は、<私>に預けていた体をおもむろにおこすと、左腕をゆっくりとあげ、密林の向こうを少し緊張を持って指さしたのです。その向こうには…。何が見えたのって? それはヒ・ミ・ツ…。

[高木由貴子]



アンリ・ルソー《夢》1910年
ニューヨーク近代美術館蔵

高松市美術館コレクション、ニューヨークへ行く!

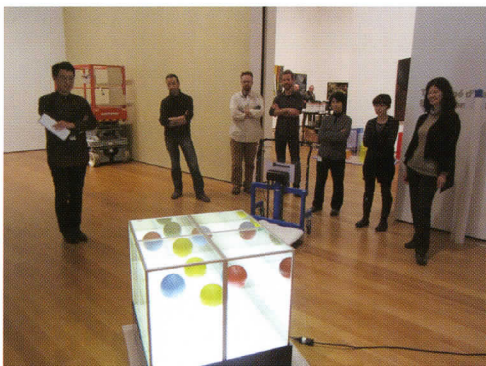
「TOKYO 1955-1970 A NEW AVANT GARDE」



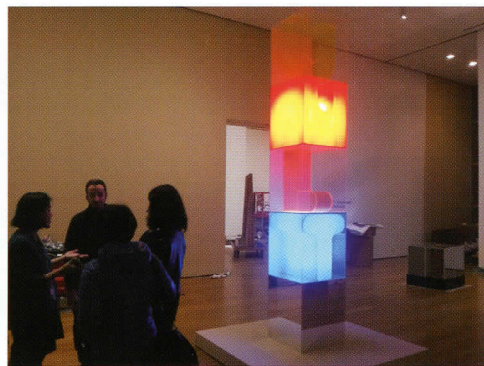
MoMA 搬入口からトラックに積んだ作品を搬入するところ。



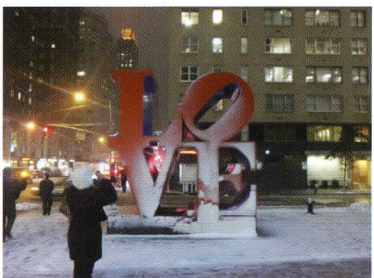
間所沙織《神話・神々のタンジョウ》の展示をするキュレーターのドリアン・チョン氏(中央)とハンドラー(展示作業員)。



河口龍夫《無限空間におけるオブジェとイメージの相關関係又は8色の球体》が無事点灯し、喜ぶ関係者一同。



山口勝弘《Sign Pole》。山口と河口の光る作品 2 点は展覧会場入口に設置され、来場者を出迎えた。



MoMA 近くにあるロバート・インディアナ《LOVE》。雪化粧姿も魅力的。

高松市美術館コレクションが 2012 年 11 月 18 日～ 2013 年 2 月 25 日、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の企画展「TOKYO 1955-1970 A NEW AVANT GARDE」に出品されました。この展覧会は、戦後日本の経済成長期に展開したエネルギーな前衛芸術の諸相を、MoMA コレクションと日本各地の美術館などから集めた 300 点以上の作品により検証する意欲的な企画で、当館からは荒川修作、河口龍夫、山口勝弘など 9 作家の作品 13 点が出品されました。この出品点数は、日本の美術館としては東京都現代美術館に次いで多いとすることで、当館の戦後日本現代美術のコレクションが「モダン・アートの殿堂」の MoMA で展示されたことは大変栄誉なことといえます。

作品の輸送及び展示に際しては、MoMA の要請により各地の美術館から学芸員が派遣され、高松市美術館からもわたくし牧野が飛行機輸送の添乗、MoMA での点検・展示などのいわゆる「クーリエ」と呼ばれる一連の作品随行作業を行ないました (空港倉庫でのパレット積み込み／積み下ろし時の立会いの寒いこと!その他色々貴重な体験をさせていただきました)。作品輸送はちょうどハリケーン「サンディ」がアメリカ本土を襲撃した時期と重なり、NY の空港閉鎖に伴いフライトが数日間欠航となるなど、波乱の幕開けとなりましたが、予定より数日遅れて作品を運んだ後は、MoMA での展示も順調に進み、無事 13 点の作品展示を終えることができました。ハリケーンでしばらく足止めを食らった時は、本当に作品とともに NY に行けるのだろうか?と、度重なる試練を経て NY にたどり着く、かつての「ウルトラクイズ」参加者のような不安な心境に陥ったものでした…。

ちなみに同展の入場者数はというと… MoMA では常時、収藏品展のほか複数の企画展

を開催しており、個々にカウントをしているわけではないのですが、同展開催期間中の総入場者数はなんと、およそ 50 万人!そのうちの何割かの方に当館コレクション、そして日本の現代美術を見てもらえたというのは、何とも嬉しい限りです。

また、2013 年 2 月 15 日～ 5 月 8 日には同じく NY にあるグッゲンハイム美術館にて日本の戦後美術を代表するグループ「具体」を紹介する

展覧会「Gutai: Splendid Playground」が開催され、こちらにも当館の田中敦子《電気服》が貸し出されました。ところで、NY では SUSHI はいまや食事の基本アイテムの一つとなっていて、スーパーでも普通に売られているほどです(わりと高価)。最近では RAMEN が人気で、私も何度か食べました。アメリカではここ最近日本現代美術の紹介が相次いでいますが、これまで欧米で周縁的な存在としてしか語られてこなかった日本現代美術が、SUSHI や RAMEN のようにメジャーな存在となる日もそう遠くはないのかもしれない。

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

ご案内

美術館ボランティア「civi (シヴィ)」によるギャラリートークは、特別展会期中の毎週日および祝日の午前 11 時～午後 2 時～の 1 日 2 回、2 階展示室にて行います。

私たちと鑑賞を一緒にしませんか?

編集後記

■「勇気を出して一歩前へ踏み出してみよう!」新聞広告に掲載されたその言葉が、私に贈られたように思えました。この春、仕事において 5 年ぶりの異動を経験しました。新しい環境が新しい縁を呼ぶのだから、今を楽しみながら前進したいと思います。[佐々木真理子]

■照屋勇賢のトイレロールの芯を使った作品、なんて美しいこと。我が家に縁あってきたトイレロールは使い終わるとすぐにゴミ箱行き。これもうんと縁があったと許してね。[鈴木典子]

■ルソーの《夢》のせいか、手近な密林、高知の牧野植物園温室を訪ねてみたくなりました。長椅子はまさか無いでしょうか…。[高木由貴子]

■今年は開館 25 周年の節目の年。2 回目の瀬戸内国際芸術祭とも重なり、祝祭的なムードが漂います。これまでの 25 年を振り返りつつ、未来(ひとはずは、これからの 25 年)にむけて、美術館はどうあるべきか、何をすべきかを考えながら、仕事をしていきたいと思えます。といっても、結局は仕事にドタバタ追い回される 1 年になるのでしょうか…。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]